

金珍娥 (キム・ジナ)

博士論文題目 日本語と韓国語の談話における文末の構造

博士論文審査 合 最終試験審査 合

## ●●審査の要旨

本学位請求論文の論文審査および最終試験は、審査委員全員が一致してこれを合格とする。

本論文は日本語と韓国語の談話を構成する文の文末がどのような構造からなるかを見ることで、書かれたことばとは異なる、実際の話されたことばの文の姿を描こうとした、斬新にして非常に大きなテーマに挑んだ研究である。異なり人数 160 名、80 組の自然会話に現れる文の、1 つ 1 つの文末の構造の綿密なる調査に基づく日韓対照研究であり、基礎となるデータの質と量、立てられた問いの大きさと深さ、問いを解いてゆく理論的な枠組みの堅実さ、将来の研究への展開を可能にする枠組みの柔軟さ、随所に見られる独創的な着想等を、高く評価するものである。既存の談話研究、文法研究、対照研究の根幹に関わる問いを、話されたことばという言葉事実に立脚して発した、真に活力ある独創的論考である。

口頭試問における論述も明快にして着実である。

## ●●博士論文審査および最終試験の結果

### ●論文の概要

本研究は日本語と韓国語の〈話されたことば〉の談話をなす文の在り方を、文末の構造体を見据えることから照らし出そうとした論考である。論文の骨格は次のごとくである：

第 1 章「序論：研究の目的と先行研究」では本研究の目的、対象と方法の総論が述べられ、基本的な述語の概念規定と、先行研究の概観が行われる。言語の実現形態としての〈話されたことば〉、〈書かれたことば〉、そして文体としての〈話しことば〉、〈書きことば〉を区別し、〈話されたことば〉の実現単位を〈談話〉と呼び、〈書かれたことば〉の実現単位を〈テキスト〉と呼んで区別する。先行研究についてはソシユールより始め、談話とテキストをめぐる言語研究の流れを、本稿とのかかわりの中で概観し、談話分析と文法研究の統合の必要性が説かれる。

第 2 章「談話データの構築」では談話データをいかに構築しているかについて詳細に述べている。〈話されたことば〉についてのコーパスの前史を概観し、話者に関する条件統制のなされた自然会話の必要性が説かれる。本研究での談話データは、全て異なった話者より構成された日本語東京方言話者の会話 40 組、韓国語ソウル方言話者の会話 40 組、計 80 組、異なり人数 160 名よりなる。話者はそれぞれ 20-23 歳の男女、30-33 歳の男女、40

—43歳の男女という話者が選択され、初対面同士の会話、友人同士の会話の2種が設定されている。また音声言語のデータ化、文字化にあたっては、従来の単線型文字化システムと異なった、本稿で〈複線的文字化システム〉と呼ぶ方法を提起している。これにより、複数の話者の発話が同時に進行したり重なったりしながら進行する、文つまりセンテンスの枠を超えた談話の〈流れ〉という、言語の本質的な部分を可視化することを図らんとする。さらに日本語と韓国語それぞれの、〈話されたことば〉を文字化するにあたっての表記の原則が仔細に述べられる。

第3章は「談話の諸単位——文、発話単位、turn」と名づけられており、談話を分析するにあたっての先行諸研究での問題点と課題が示されたのち、〈文〉とは何か、〈turn〉とは何か論じられ、〈発話単位〉という新たな単位が提起される。とりわけ単に「発話の順番」であるとか、「発話権の交代」、「発話のうけつぎ」などとされてきた turn-taking については、turn を新たに定義しなおすことにより、turn-exchange 論という新たな図式を提起する。同時にこれまでは turn とは認定されていなかったいわゆる〈あいづち発話〉を、turn-exchange 論の中に位置づけなおし、turn の移行における〈あいづち発話〉の機能が提起される。相手の turn を区切る役割を果たす〈turn 切断子〉の概念も提出される。談話の単位は、一人の話者が turn 切断子や前後の沈黙により発話を止めるまでの発話の遂行である、動的な単位としての〈turn〉、modality を随伴し、発話として実現する文法的実現体である、静的な単位としての〈文〉、一人の話者の turn の中でも文の切れ目、turn 切断子、前後の沈黙により分けうる音声的实现体である、静的な単位としての〈発話単位〉という区別が定式化される。

第4章「文末の構造体」では文末の構造体を描く枠組みが示される。1つは文末に述語が存在するか否か、いま1つは文末がいかなるカテゴリーの品詞で構成されるかという、2つの点からの分析の方法が提起される。述語の概念規定が確認され、〈用言複合体〉、「読みましたよ」のように用言が1つの自立語に総合されている〈総合的な形〉と、「するかもしれない」「しないといけない」のように、2単語以上が結合し、1つの用言の語形の1種のごとく文法化された〈分析的な形〉があることを踏まえたうえ、用言の品詞の同定を論ずる。品詞の道程は日本語と韓国語のそれぞれの学校文法に一定の基礎を置きながらも、それらを対照して論じうるような一般化が行われる。スピーチレベルや倒置文についてもここで言及されている。

第5章「非述語文」では述語の有無という観点から見た談話データの分析に入る。談話データそれぞれの会話の最初の5分間の文の総数を見ると、日本語は9072文、韓国語は7105文という差が現れることがまず述べられる。これは日本語と韓国語が、相手の発話に重なる発話が見られる様相が異なっていることに起因することが明らかにされる。続いて、日本語にあっては文の58.0%、韓国語では53.7%が、述語で統括されない〈非述語文〉であったことが報告される。そしてそれぞれ初対面と友人同士、男性と女性という性別、世代別、年齢差別の計量データが示される。さらに品詞論から見た日本語と韓国語の〈非述

語文)の文末の構造体の類型が、「間投詞系」「名詞系」「副詞系」「接続詞系」「連体詞系」「用言系」「助詞系」といったカテゴリーごとに、実際の用例を挙げながら対照される。〈あいづちの再帰用法〉と名づけられた、話者自信の発話に対するあいづちの機能、常体で終わる発話に敬体の間投詞を添えることで当該の文を敬体化する(間投詞の丁寧化用法)、当該の文をソフト化させる(間投詞の緩衝機能)といった、既存の研究ではほとんど論じられていなかった、間投詞が担う機能もそこで示される。

第6章「述語文」では文末が述語で統括されている文、即ち〈述語文〉の文末の構造体が類型化され、実際の用例と共に分析される。(1)「卒業しました」のような用言単独、もしくは用言と付属語が結合した総合的な型、(2)「見たことないですか」のような、用言の分析的な型、(3)「時間かかる+でしょう」のように用言と付属語が結合した分離可能型、(4)「共有されちゃってるかなってような感じですね」のような、用言に付属語が複数結合した付属語複合型という、4つの類型ごとに日本語と韓国語それぞれにおける現れ方が論じられ、また、(3)は韓国語には存在しない、(4)が日本語ではとりわけ顕著であるなどといった、日本語と韓国語の違いが論じられる。

第7章「非述語化のメカニズム」では、〈述語文〉と〈非述語文〉のいわば間が論じられる。例えば「A:牛丼なくなっちゃいましたよね。」「B:なくなっちゃいました。豚とか」に対する「A:ね。」(Bの発話の最後に重なっている)という文は、助詞「ね」だけで構成されており、述語が存在しないにもかかわらず、〈述語文〉のような働きを持っている。「そう、そう、そう」といったあいづち発話もまた同様の働きを持つ。逆に、「絶対聞き取れないとか」「日本ってちっちゃいんだなーって」などのように、用言から構成される述語が存在するにもかかわらず〈非述語文〉のように働く文も、ここで解析される。これは後続するであろう「思った」「考えた」などといった単語があつて、それらが「省略」されたというようなものではなく、目的意識的に、あたかも何かが〈隠してある〉ように見せる表現であり、構造であること、〈述語文〉が〈非述語文〉へと変容するメカニズムであり、〈緩衝表現〉として機能することが論じられる。日本語と韓国語における連体形で終止する文、「かも。」だけとか、「じゃない?」「ませんね。」「らしいんですよ。」といった付属語のみからなる文についても議論されている。

第8章「緩衝表現」では、文末を構成する表現のうち、実質的な意味を持たず、一旦終止した文にくっついていわば文の緩衝材としての働きをする表現を〈緩衝表現〉と呼び、日本語と韓国語のそれぞれについて、実際のデータから抽出し、類型化して示している。「いう」「思う」など自立語を用いた語彙的緩衝体、「っていうか」「っていつて」「と違って」「感じ」など、「たり」「とか」「って」など文法的な働きを持つ助詞類による文法的緩衝体、「ような」「みたいな」「らしい」のような語彙・文法的緩衝体の3つに類型化している。日本語の「良かったかなーとか思ったりしてんだけど。」「一人とかだったりするからー。」のような〈複合緩衝体〉の存在も言及される。韓国語は語彙的緩衝体、文法的緩衝体のほかに、“hay kaciko”(…してもって)、“hako kureta”(…したりする)などの〈分析的緩衝体〉

が著しいことが論じられる。

第9章「総括」では全編を要約し、総括している。

## ● 評価

以上のような論文に対し、審査委員より高い評価を得たのは次のような点である。

第一に評価されたのは、目的と対象、方法が鮮明である点である。本研究の目的は日本語と韓国語の〈話されたことば〉の談話をなす文の在り方、その存在様式を描くことにあるとする。本研究の立てているこうした問いは、文はいかに自らを終えるか、つまり文とは何か、発話とは何か、といった、言語研究にとって極めて本質的かつ雄大な問いでもある。そしてそうした問いは、日本語と韓国語の対照研究という姿で言語事実に立脚した明確な方法のもとに解かれてゆく。既存の研究ではややもすると避けられてきた問いに、正面から向き合い、かつ〈話されたことば〉という言語事実を直視する点が高く評価された。

第二に、日本語と韓国語の対照研究という姿で言語事実に立脚した明確な方法を支える、実際の言語データの構築の質的、量的な高みである。国家機関や大学、プロジェクトなどが構築している既存の膨大な談話データも、自然会話となると著しく少ない。このことを見ても、自然会話を厳密な条件の下に文字化しデータを構築することの難しさがわかる。そうしたなかで、異なり人数 160 名、重複なしの 80 組におよぶ日本語と韓国語の自然談話データの構築は、これを個人の研究者がなしえたというだけでも、驚くべき成果である。のみならず、言語形成地から東京方言、ソウル方言に限定し、かつ年齢や性別、受けた教育など、条件が高度に統制されている点でも、既存の談話研究の成果と限界を十分に踏まえたデータ構築を克ち得ている。年齢層を単に 20 代とするのではなく、20-23 歳のように幅を限定するのは、例えば 30-33 歳の話者と明らかな年齢差を設定するためである。年齢差 1 つとつても、韓国語話者にあっては 1 歳の差も言語に直接反映するものであるところから同じ 20-23 歳の組み合わせの中でも、厳密に同年齢で組み合わせるなど、データ構築は極めて厳密である。

第三に評価されたのは、日本語と韓国語の実際の〈話されたことば〉を 1 つの枠組みで分析、記述しえたという点である。〈話されたことば〉の重要性は、かねてから言われては来たが、とりわけ韓国語については日本語に比べると談話研究が立ち遅れていた。そうしたなかで、この 2 つの異なった言語を 1 つの枠組みで照らす枠組みを提起しているという点、のみならず、その枠組みが極めて柔軟性の高い有効なものであるという点は、審査委員が異口同音に評価するところである。日本語と韓国語以外の他の言語にも応用ができるであろう、またこののち研究するであろう、他の研究者にも極めて参考になるものであるという評価もなされた。

評価された第四の点は、複線的、動的に談話を捉えたということにある。実際に動いている談話を、その流れの中から捉えるというのは、これまでわかっているようで、実は意

外に記述されていないところであった。とりわけ「発話権」とか単なる「順番」とされてきた turn を、ではその「順番」とはどういうことなのかと、さらに問いを突き詰め、物理的な発話の遂行にその根拠を求めて位置づけなおし、turn を与える側、受ける側の双方から見つつ、あいづち発話を正當に位置づけなおし、その動的な働きを描き出した turn-exchange 論は、従来の turn-taking 論に比べ、はるかに立体的かつ有機的なものである。(turn 切断子) といった独創的な着眼も有効である。互いの発話が重なって現れることも可視化する、本稿で提起しているところの〈複線的文字化システム〉も、こうした動的な把握に寄与するところ大である。

評価された五つ目の点は、〈述語文〉と〈非述語文〉とに分けて文を観察している点、さらにその中間的な存在である文を見落とすことなく、〈非述語化のデバイス〉という形で分析、記述した点である。着想も実際の分析も極めて面白いものであるとの高い評価を得た。日本語と韓国語における連体形で終止する文、「かも。」だけとか、「じゃない?」「ませぬね。」「らしいんですよ。」といった付属語のみからなる文についても議論されている。連体形終止が文の終止を担う例の存在などは、韓国語の〈話されたことば〉の記述ではおそらく初めてのもので、類型論的な意義も認められる。日本語と韓国語の、助詞だけで構成される文や助詞から始まる文の日韓対照などは極めて興味深いものである。〈あいづちの再帰用法〉と名づけられた、話者自信の発話に対するあいづちの機能、常体で終わる発話に敬体の間投詞を添えることで当該の文を敬体化する〈間投詞の丁寧化用法〉、当該の文をソフト化させる〈間投詞の緩衝機能〉といった、間投詞の持つ機能についての指摘も新鮮である。(述語文) と (非述語文) のこうした類型化、またそれらの中間的な存在の分析は、1つ1つの具体的な文に向き合う、極めて煩瑣にして忍耐強い分析が必要である。こうした1つの類型化がなされていることは、今後の研究へ寄与することの大なるものがあるとされた。新しいデータが出てきたさいに受け入れやすい、可塑性の高い柔軟な枠組みとなっていることも評価された。

評価された六つ目の点は、日本語と韓国語の〈緩衝表現〉の初めての対照的な定式化、類型化である。データより抽出されたさまざまな例は、それらの一部については日本語では論じられているものの、日本語と韓国語を対照して総括的に類型化した記述は未だ登場しておらず、今後の研究にも大きく寄与するものである。

そして最後に、日本語と韓国語の談話研究と文法研究をいわば統合する研究となったという点である。談話研究と文法研究それぞれの良さを生かし、欠点や限界をいかにして超えるかという道を実践的に示しているものとなっている。なかんずく日本語にあつては文の 58.0%、韓国語では 53.7%が、述語で統括されない〈非述語文〉であったというような事実は、〈主語－述語〉あるいは〈述語を核とする〉というような、〈文〉についてのア・プリオリな図式を揺るがすものであり、もはや〈文〉というもののイメージの根底からの描き直しを文法論に要求するものだといってもよい。談話にあつては〈述語文〉と〈非述語文〉が様々な類型をもって現れること、〈非述語文〉が、述語を用いずに、いかにして終わ

るのかということについて、初めての解析のメスが本研究によって入れられたのである。

高く評価された以上のような点のみならず、批判もまたなしとしない。

記述のあり方において、まず目的と結論の対応関係をより鮮明な形で記述すべきであること、本研究の不十分な点についての記述も、のちの研究にとっては貴重であるがゆえに、より鮮明になされるべきであること、12 ページという量があるとはいえ、文献一覧のピリオドの抜け落ちなどはいささかもゆるがせにはならないこと、序論においては言語一般についての議論なのか、日本語と韓国語についての議論なのかが曖昧な記述が見られるのは鮮明にすべきこと、データ上の記述はするが計量には入れていない〈笑い〉の扱いなどを鮮明にすること、文の完結する3つの条件の関わりをより鮮明に述べること、データの品詞分析上のいくつかの誤字を修正すべきであること、〈turn〉についてこれだけ掘り下げ新たな意義を見出しているのであるから、もはや〈turn〉という術語を捨ててもいいのではないかといった指摘がなされた。また、内容については、とりわけスピーチレベルなどについて、話者同士の双方向のダイナミックな分析、いかなる条件で〈非述語化デバイス〉が用いられるかといった相互作用という観点からの分析をさらに押し進めてほしい、話者同士の双方向のインタラクティブな談話・テキスト形成、生成という観点からもより踏み込むべきである、本稿で示している話しことば的な多くの縮約形、異形態の文体的意味、待遇的価値といったものについても掘り下げてほしい、文末の構造体の分析は形態、とりわけ要素の配列に重点が置かれているが、それら構造体それぞれが有する機能という点まで踏み込んでほしい、といった指摘があった。第8章の緩衝表現はさらに発展させてほしい、とりわけ日本語と韓国語との違いを際立ててまとめるべきであるとの指摘もあった。また、ソシユールから談話分析にわたり先行研究を渉猟しているのはよいが、それらの記述がやや紹介的に流れている、より批判的に記述すべきであること、宮岡伯人、E.バンヴェニスト、蒲谷宏、本多啓といった論考も参照すればより深まった議論が可能となるであろうという指摘がなされた。

上のようないくつかの問題点の指摘にもかかわらず、審査員の全員が一様に認めている本研究の価値はいささかも揺るがない。本研究はいわばこれまで別々の歩みを歩んできた感の否めない談話研究と文法研究を統合した、初めての日韓対照研究であり、膨大なデータに立脚しつつ、いわば談話研究や文法研究の様々な領域に、場合によっては再考を迫るほどの問いを提起した研究でもある。文とは、発話とは、turn とは、そしてそれらはいかに談話を構成するのか、また日本語と韓国語の〈話されたことば〉において文が自らを終えるとはいかなることか、文が文として実現するとはいかなることかという、〈書かれたことば〉に依拠してきた既存の文法研究がおよそなしえなかった点に分け入った本研究は、こののち長く研究史上の意義を語られるものとなる。

川口義一早稲田大学大学院教授，生越直樹東京大学大学院教授，富盛伸夫本学外国語学部教授，伊藤英人本学大学院助教授，主査である野間秀樹本学大学院教授による口頭試問に対する，金珍娥氏の議論も鮮明であった．本質的な問いにも言語事実を挙げながら，極めて明快に答えており，これも一様に審査委員会の合格とするところである．なお，口頭試問は試験ということを超えて，多様な専門分野を持つ審査委員それぞれの知見と，金珍娥氏の知見が飛び交う，真に学問的に刺激的，知的な時間となったことを付け加えたい．

本審査委員会は，金珍娥氏の『日本語と韓国語の談話における文末の構造』を〈優れた〉論文であるばかりでなく，学問的な意味において真に〈面白い〉刺激的な論文であるという審査員一同の認識のもとに，満場一致で博士論文として認定するものである．